

## J R西日本の職場を創り変えよう！

## Vol. 1

# 物言える職場に！

J R西日本福知山線で発生した脱線転覆事故から3週間。現場には今も人々が献花に訪れるなど、事故の悲惨さによる追憶は消えず、心の痛みも未だ癒えることはありません。一方、国家レベル、会社レベル、あるいは労組など各方面の思惑から「再発防止」や「原因究明」が語られ、マスコミの報道もそれに追いつけ追い越せと報道合戦がおこなわれています。しかし、いかなる報道がされようとも、私たちがこれまで一貫して主張してきた安全な鉄道を求める姿勢は変わることなく、その背景や原因の究明、再発防止に全勢力を傾注することを惜しみません。

### 日勤を生み出した過程が問題だ

「企業犯罪」とまで厳しく批判されるJ R西日本の「事故」体質。その体質を変えるためには、信楽事故や尼崎触車事故のような事故がなぜ繰り返されてきたのかという問題性に遡り、原因を掘り下げなければその本質は見えてきません。

例えば「日勤教育」という言葉が世間に広まり、今回の事故原因の背景として映し出されました。しかし「日勤」をはじめとした「いじめ」など、会社の事故対策ならざる再発防止策などに問題があったことは、今更始まったことではありません。この間、事故のたびに犯人探しが行われ、乗務員に責任転嫁されてきました。そして日勤「教育」が強いられ、「物言えぬ職場」ゆえ自殺者まで出してきたのです。

こうした「日勤教育」の問題をはじめ、会社の体質に警鐘を鳴らし続けてきたJ R西労の声に会社は耳を傾けず、これを嫌悪し、破壊さえしようと介入を企ててきた姿勢に問題があるのです。

### 未だ旧態依然の現場管理者

いまJ R西日本の運転職場では、乗務員のミスによる日勤教育が急遽「改め」られ、挨拶すらしなかった現場長が白々しく「声かけ」運動を行い、社員からの「聞き取り調査」が今さらのようにおこなわれています。そうした職場実態を見て、J R西日本の体質が変わったと言えるでしょうか。

姫路列車区では、『責任ある行動を』と実質的な「緘口令」ともいえる“宣約書”が配布され、署名・捺印して提出が求められるということも発覚しています。これは社員の自主性を損なうことを強制するものでしかなく、会社の隠蔽体質や事故を真摯に受け止めることが出来ない現場管理者の体質が現されているといえます。J R西日本は「企業風土の改善」と言いますが、労使関係も含めた物言えぬ職場の改善無くしては、その体質改善はありえないのです。